

平成 25 年度 外国人留学生・中国引揚者等子女 小論文
出題との意図と解答の傾向

【出題の意図】

『暴走する「世間」－世間のオキテを解析する』（佐藤直樹バジリコ株式会社）より出題した。

現代の若者の社会に向ける視点を問う。母国で育ち、今、日本で生活する中で“消費”についてどのような意識を持ち、経験してきたのか、問うたものである。

現代の若者にとって「ケータイ（携帯電話）」は物心がつくころには既に当たり前のように存在していたものである。しかも、この現代の利器は今もどんどん進化し続けており、若者にとって「ケータイ」は必須の消費材の一つとなっているように思われる。

日本社会（また留学生の出身の社会も）が消費社会と言われるようになって久しいが、生産という行為を経験する前に、消費という行為に幼児期から鳴らされ、自らも消費を行う若者たちが、消費についてどのように考え、判断するのか、自身の消費行動についての意識を明確にすること、そして、自身の考えを表現する日本語の力を見ることも目的である。これまで問題として意識したことがない者も、これを契機として社会に向ける自身の視野を広げ、考えを深めていってほしい。

【回答の傾向と出題の基準】

<設問 1 >

a 画数の多い漢字にもかかわらず、正解率が最も高かった。ただし、「帯」の字を中国語の簡体字で書いた受験者が数名いた。b（こわだか）、e（じつづき）はほとんどできていなかった。慣用音に不慣れであり、語彙力の問題であると思われる。「地」は本来「土地、敷地や地理、地図など」、「土」に関する「チ」だが、濁音になると、例外を除き「ヂ」は「ジ」と表記されるルールが習得されていない。c（つうわりょう）、d（そうたいてき）については、比較的高い正解率であったが、「つうわりょ」、「そうだいてき」など、長音を短音に、清音（無声音）を濁音（有声音）とする外国人学習者によく見られる誤りが多かった。

<設問 2 >

「うっとうしい光景」の「うっとうしい」の意味が理解できず、街中での携帯電話使用への筆者の不快感がつかめなかった受験者が多かった。

<設問3>

子どもの携帯電話の使用料を、親が負担する日本社会と子ども自身に負担させる欧米社会の違いは、多くの受験者によく読み取られていたが、子どもを甘やかす（日本社会）への批判までを読み取っていた受験者は少なかった。

<設問4>

『『小さな大人』化』が指すのは、「子どもが消費社会の中で、おカネさえ持っていれば、大人と同様に扱われ、その消費行動が受け入れられる」といった内容である。多くの受験者が理解していた。

<設問5>

全体として、問題文の要点である「日頃の消費生活を内省し、影響を及ぼす社会的要因」をきちんと読んで論述がなされていたと言える。しかし、根拠を挙げて、自論を明確に証明している受験者は少なかった。単なる世論的な批評にとどまるもの、また問題文にとらわれすぎて自論がないもの。自分の論旨、意図が明確になっておらず個人の感想でしかないものもいくつか見られた。「消費行動に影響を及ぼす社会的要因」として、実際に挙げられていた例は、「情報社会の発展による携帯やPCの普及率の増加」、「政府の政策や銀行の金利」、「商品開発やブームをつくり出す企業の社会責任」、「原発の安全性と電力価格との関係」、「自動販売機の普及」、「自動車の所有率」、「少子化の影響」などがあつた。

<設問6>

該当する受験者なしのためコメントはしない。